New Landscape with History

新・歴史の見える風景

福屋（大和）百貨店

（福井市初の高層建築）

昭和3年7月6日、福井駅前にだるま屋百貨店が開店した。経営者は坪川信一で、教員を務めた後、商工会議所の書記長となり、商業や百貨店経営について関心を深め、福井県庁の城内移転によって生じた空き地の活用として市内の有力経済人の支援を得て、開業にこぎ着けた。

福井初の百貨店であったことに加え、行き届いた接客や展示、さらに地元商店との協調体制もあり、市民に好評で、駅前発展の基礎を築いた。

その後、駅前北通りに吉野屋百貨店が新築オープンした。市内で初のエレベーターを設置し、取扱商品も都会並みに貴金属類を充実させるなど努力を重ねたものの、立地面での不利を覆せず、短期営業に終わった。

次いで昭和11年には、佐佳枝上町の大名町交差点付近に福屋百貨店がオープンした。現在の北陸銀行福井支店の場所である。資本は金沢の宮市大丸系に、濃畑三郎など三国や福井の経済人が加わったもので、5月には会社を設立した。新規開業が伝わると、地元商業界は反対運動を展開したが、すでに計画段階から実行段階に入っており、この運動は不発に終わった。

店舗は7月に着工し、12月3日に竣工、5日より開店。地下1階、地上6階の鉄筋コンクリートで市内初の高層建築物、店舗床面積1580坪、従業員300名体制であった。

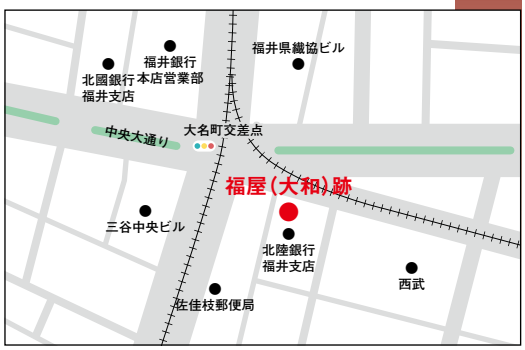
福屋百貨店の開店は、駅前の中心市街地化に拍車をかけ、京町・呉服町など旧北陸道沿いに発展した福井の商業地図を根底から変えていった。なお開店から9ヶ月後には宮市大丸と合併し、体制を強化している。

しかし、戦局の悪化とともに、建物は供出の対象となり、上層階は戦時統制会社が使用し、売場は縮小された。また会社も戦時統合で、新たに大和百貨店となった。

昭和20年7月の福井空襲では、建物内部と商品は全焼失となったが、懸命に復旧に努め、2階部分に応急対策で仮売場を設け、被災から1週間後に戦災特別配給品の配給を始め、綿布や米・味噌・醤油など最低限必要な物資を取り扱った。

終戦後も、復旧を進め、1年後には1階から4階まで売場での営業が可能となった。土地建物は加藤尚に売却され、この資金も活用し、昭和23年には全館の復旧が完了し、中元商戦の準備に入った6月28日、福井大地震に見舞われた。建物は甚大な被害を受け、それは福井地震の激しさを象徴するものとなった。

昭和26年12月、大和百貨店は福井から撤退を決定し、15年の営業に終止符が打たれた。（文　奥山秀範）



開店時の新聞広告

開店時の福屋百貨店

戦前（昭和10年代）の福屋百貨店。手前には福井信託ビルが写る

半壊した大和百貨店福井店、激震を象徴するものとなった。幸い閉店後で一人の犠牲者も出なかった